

高温時における果樹の栽培管理について

令和元年 8 月 2 日
長野農業改良普及センター

1 共通

- (1) 農作業中の熱中症を予防するため、炎天下の長時間にわたる作業はできるだけ控える。
また、帽子等日除け対策を万全に行うとともに、十分な水分補給と休憩時間を確保し、体調がすぐれないときは作業を中止する。
作業服は吸湿性・通気性の良いもので、熱を吸収しないもの(白系統の色)にするとよい。
帽子も通気性の良いものを着用する。ハウス等の施設内作業については特に注意する。

2 果樹

(1) かん水

- ア 天候やほ場の水分状態、土壌条件に合わせて、適宜、かん水を行う。
かん水量は、第 1 表の基準（果樹指導指針）を参考とする。
なお、かん水設備のない地域では、土を掘って下層の湿潤状況を調べるなどし、かん水が必要な場合は、タンク等で水を運んで無駄のないよう樹冠下を中心に散水する。(ほ場面積の 60%程度が目安)。水量が少ない場合は、かん水の時間帯は、夕方が望ましい。かん水後は蒸散防止のため敷きわら、マルチ等を行う。

第 1 表 かん水量とかん水間隔の基準		
土 壌	1 回のかん水量	かん水の間隔
粗粒質	2 0 mm	4 日
中粒質	3 0 mm	7 日
細粒質	3 5 mm	9 日
黒ボク土	3 5 mm	9 日

- イ あらかじめ草刈りを行い、雑草との水分競合・蒸散を防ぐ。
ウ りんご、なしの落果防止剤は、高温乾燥条件下では効果が低下しやすいため、処理 2 ～ 3 日前にかん水を実施するとともに、散布後もかん水を継続して実施する。
エ ももは、収穫前の高温乾燥により成熟が遅れる場合がある。5 mm 程度のかん水を数日おきに行い、成熟を促す。なお、中晩生種では、収穫開始 10 日前まで通常のかん水を行う。
オ ぶどうは、急激な土壌水分の変動は裂果を誘発するので、土壌を乾かしたままにしない。
また、高温乾燥により果肉の軟化や着色不良につながるので、定期的にかん水する。
カ なしは、品種により葉焼け症状が発生する場合がある。また、高温乾燥は果実肥大や日焼け果発生への影響が大きい。定期的なかん水を行い、症状の進行を防止する。また、ハダニ類の加害により葉焼けが助長されるので、ハダニ類の防除も徹底する。

(2) 樹体の日焼け対策

主枝、亜主枝等、骨格枝の背面部は日焼けが発生しやすい。徒長枝は全て切らずに、間引くか新梢基部を 30cm 程度残す等して、「日除け」枝を設ける。葉がない部位は、白塗剤、わら、段ボール等で日除け対策を講ずることも有効である。

(3) 果実の日焼け対策と着色管理

- ア 果樹類の基本として、着色管理等の新梢整理にあたっては、果実の日焼けが発生しやすい南西方向の樹冠外部の切除量を加減するとともに、除袋と葉摘みの時期をずらすなど、日焼けが発生しないよう配慮する。
イ りんご等の着色管理では、日が当たる部位の葉摘みは一度に強く行なわない。また、午後から夕方にかけて葉摘みすると日焼けが少ない。玉回しに適した作業時刻も同様である。
なお、果実を回す角度が大きいと日焼けを生じやすいので注意する。

ウ りんごの果実への日焼けは、「つがる」「シナノリップ」などの早生種だけでなく「秋映」「シナノゴールド」など中晩生種にも発生するので、発生が懸念される園地では早急に園の南～西側に遮光被覆資材を設置する。また、設置期間は、最高気温が 34℃程度以下となる 9 月上旬までとする。

エ ぶどうでは笠をかけると日焼けが軽減される。笠かけが実施されていないほ場では、速やかに笠かけを行う。なお、日当たりの強い箇所には遮光率が高いクラフト笠を用いる。

オ ももで日焼けが心配される場合は、除袋をする 2～3 日前に袋の尻を破り、馴らしてから除袋をする。また、ピーチ袋等、ワックス袋は日射により高温障害が発生する場合がある。高温が続く場合はワックス袋の下部を上げるか、袋を外すなどして対応する。

(4) その他（収穫・害虫対策ほか）

ア りんご、もも等の成熟は果肉先熟傾向となるため、果皮色に頼らずに果肉硬度に注意して適期収穫を行う。

イ 高温乾燥によりハダニ類・シンクイムシ・アザミウマ類などが増加しやすいため、適期防除に努める。散布に際して、特にハダニ類は防除死角が生じないように留意する。

ウ ぶどうでは高温乾燥でボルドー液等の薬剤散布を省略すると、さび病の発生が懸念されるので、少雨であっても定期的に薬剤散布を行う。